

若き図書館員へ 私の提案

折井 匡*

信州大学附属図書館医学部図書館

I. はじめに

私は2021（令和3）年度で延長雇用が終わり、信州大学を退職する。1976（昭和51）年に国家公務員として奉職してから3年を除いて、残りの全てを図書館職員として精勤してきた。特に医学部図書館での勤務は27年にもなる。

今回「医学図書館」編集委員会より原稿の依頼を受け、自分の図書館の仕事の足跡を顧みつつ、図書館で働く後輩たちに、ぜひ実践してほしい3つのこと（行動）を提案したい。

II. 偶然から始まった図書館の仕事

私が大学図書館職員になったのは、偶然が重なったことによる。

小中学校では毎日のように学校図書館へ行き、借りてきた本を読んでいた。高校に入学し担任の先生より名簿順に生徒会の役員を指名され、私は図書委員になった。これまで図書館を利用する側だった私にとって、運営する側の図書委員は大変面白く、将来司書になりたいと思うようになり、担任の勧めもあり図書館司書資格を取得できる大学の受験勉強をした。

ところが2年生の時に、オイルショックの影響もあり父が失職してしまった。大学進学をあきらめ、国家公務員試験を受けて、霞ヶ関にある行政管理庁（現・総務省）に合格した。書類提出のため人事課へ行ったところ、高卒の職員のほとんどが夜間大学へ進学していることを教えられ、職場もバックアップするとのことであった。諦めた司書になれることが分かり、司書資格が履修できる夜間大学を探して、図書館学科のあるT大学社会学部第二部に入学した。

初登庁して辞令交付を受けたところ「国立国会図書館支部行政管理庁図書館」勤務であった。人事課の方の配慮だと思われた。国立国会図書館（以下、国会図書館）には行政・司法の官庁等に支部図書館があり、各分野の専門図書館として設置されている。支部図書館の職員は各省庁の職員で、館長は国会図書館からも辞令が出ていた。行政管理庁は、行政機関の定員管理や行政監察、国の統計の許可などを行う官庁で、行政管理庁図書館はそれらの分野の図書を収集・整理していた。

普段は、受入や貸出などの一般的な図書館業務を行った。国会図書館が行う研修会には希望すれば参加でき、当時の最先端の情報を知ることができたが、あまりにも高度な内容で分からないことも多かった。雑誌の製本技術やマイクロフィルムの取り扱いなど、その後の仕事にも役立つ技術を習得できた。

9時15分から17時30分まで勤務した後、地下鉄を乗り継いで18時からの授業を受けた。授業を受けて寮に戻ると22時過ぎという生活を4年間繰り返して卒業し、司書資格を取得できた。卒論は当時まだ珍しかった複写機をテーマに『公共図書館の複写サービス』を提出した。

卒業直後に行政管理庁長官官房会計課の管理係に異動した。管理係は物品管理と庁舎管理を行う部署で、物品管理法を先輩からしっかり教わった。第二次臨時行政調査会（通称：土光臨調）の資料室の整備なども行った。

入庁7年目に長野県に帰りたいと上司に話したところ、文部省（信州大学）へ交流人事として出向することができた。信州大学では図書系職員として、医学部図書館に配属された。前職と同じ図書館でも対象となる利用者が違い、全ての業務が新鮮であった。

その後、信州大学附属図書館中央図書館に12年、山梨医科大学附属図書館（現・山梨大学附属図書館医学分館）に4年、そして信州大学附属図書館医学部図書館は23年目になる。2019（平成29）年に定年となり、2021（令和3）年度で非常勤職員としての再雇用も終了する。

*Tadashi ORII：ヘルスサイエンス情報専門員（上級）

〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1. orii.tadashi@gmail.com

(2021年9月28日 受理)

Ⅲ. 医学部図書館の地域貢献

信州大学は地域貢献に力を入れている大学で、毎年発表される『日経グローバル』誌の地域貢献度ランキングでは常に上位を占め、2020年度も1位になっている。医学部図書館の係長になってからは、以下のような地域に貢献するシステムを計画し実行できた。

- ①JDream II（現在はⅢ）のコンソーシアムと、関連病院への文献複写物のワンストップ提供¹⁾
- ②附属病院患者図書室（こまくさ図書室）の設置と地域住民への開放²⁾³⁾

①はコンソーシアムにすることで、信州大学医学部の関連病院に、安価に文献データベースを提供している。関連病院の医療従事者が必要とする文献は、医学部内の教室からの依頼と同様に、図書館システムで処理し、自館または他館から複写物を入手して、提供している。

②のこまくさ図書室は、松本市図書館の図書館システムで運用されていて、松本市の蔵書検索システム（OPAC）で調べた市民が、こまくさ図書室が所蔵する医療関係の本を借りることもできる。医療関係図書は附属病院が購入する一方、文学書などは松本市図書館から団体貸出として提供され、配架している。現在は信州大学附属図書館と松本市図書館の交流の拠点となっている。

これらの取り組みの詳細は、信州大学の機関リポジトリ（SOAR）で参考文献として読んでいただきたい⁴⁾。

Ⅳ. 私が伝えたい3つの実践提案

1. 図書館を見学する

私は、出張や旅行の際、時間があれば事前に調べてその地の図書館（医学部図書館だけでなく、患者図書室・公共図書館など）を見学した。

国立大学が法人化する前は、同規模の大学の図書館であれば設備や蔵書は大差なく、サービスの方法だけが違っていた。自分が勤務している図書館との比較を行い、見学した図書館の良い点を調べて業務の参考とした。中には自館のほうが優れていると判断する場合もあり、言葉にしないが心の中で快哉を叫んだ。

2019（令和元）年の第36回医学情報サービス研究大会（MIS36）は九州大学医学部（病院キャンパス）が会場であったが、九州大学伊都キャンパスの附属図書館中央図書館や佐賀県の武雄市図書館を見学した。「百聞は一見に如かず」とはよく言ったもので、見学することで文献やインターネットでは分からないことも体感できる。

九州大学の伊都キャンパスは、他のキャンパスを統廃

合して、2018（平成30）年に完成した。博多駅や最寄り駅から路線バスが運行しており、図書館の入口前に「九大中央図書館」バス停がある。アクティブラーニングスペースの「きゅうとコモンズ」では学生が会話をしながら勉強していた。信州大学中央図書館でも同じようなスペースはあるが、ここは1,000平米という広さで、研修会やイベント会場としても利用していた。あまりのスケールの大きさに参考にはならなかったが、最先端の大学図書館を知ることができた。

TSUTAYAの経営母体が指定管理者となっている武雄市図書館でも、TSUTAYA店舗でレンタルビデオを借りる時に使っている無人システムで、図書の貸出をしていると知ることができた。閲覧席よりも館内に併設された大手コーヒーチェーン店の方が、座席数、利用者ともに多かった。

他館の事例を応用した例では、2015（平成27）年に信州大学中央図書館がリニューアルオープンした際、私の意見で壁紙の下に鉄板を入れてもらったことが挙げられる。このことにより掲示物や展示物をセロハンテープや画鋏を使用することなく、マグネットで壁に付着できるようになっている（写真1）。これは長野県内の市立図書館の展示スペースのアイデアを使わせてもらった。

また、関東地方の大学図書館を見学した際に、日刊紙を閲覧するためのパンチ穴を空ける方法にヒントを得て、簡単に2つの穴が空くパンチ台を自作した。医学部図書館では15年ほど使っていたが、昨年から市販パンチを改造した新しい穴あけ方法に変更している（写真2、写真3）。

2. ボランティアをする

いろいろなイベントにボランティアで参加することも勧めたい。信州大学医学部図書館がある松本市では、セイジ・オザワ 松本フェスティバル（以下、OMF）^{注1)}や松本マラソンなどでボランティアを募集していて、応募すると実際の運営に携わることができる。

OMFのボランティアは、コンサートを安価で鑑賞できるなどの特典も無く、演奏者と業務以外で接触することも禁止されている。フェスティバルの事務局とボランティアの代表が契約を結び、仕事を請け負う形で運営を支えている。ボランティアはクローク、チケットもぎり、会場案内、ドア係、売店などを担当する。当日どのような仕事になるかは指定された時間に集合するまで、分からないのも楽しみであった。7年ほど前の公演最終日に売店担当になった時、OMFオリジナルのお土産用



写真1. 展示物を壁にマグネットで貼る



写真2. 1つ穴2台を使った新聞用穴あけパンチ (自作)
台の端に合わせて使う



写真3. 市販品を改造した新聞用穴あけパンチ
4穴ができるが、そのうちの2穴を使う

菓子の販売を任せられ、大量の在庫を全て売り切った時は、図書館員では味わうことができない高揚感を感じることができた。

長く参加していることもあり、新人ボランティアを指導する仕事や、特定公演日のボランティア全体を統括するチーフリーダーも複数回経験した。

イベントに参加することで、自分に与えられた役割を行うにはどのような情報が必要で、その情報をどのように得て、その後どう動いたら良いかなど、イベントを運営する際に必要なノウハウを習得することができた。

昨今、大学図書館では、シンポジウムや講演会などが開催されることが多くなっている。それらの催しも裏方として働く人が居なくては円滑な運営ができない。OMFの経験が大変役立った。

また、ボランティアの参加者はいろいろな職種の方でいて、それらの人と親交を深めることで、見識を広めることができた。

退職後は時間があるので、附属病院あるいは松本城の案内のボランティアに参加させてもらいたいと思っている。

3. 雑誌への投稿

雑誌への投稿は、その時の状況を多くの人に知らせてもらえるだけでなく、自分が実施や体験をした仕事の足跡を残すこととも言える。発表後に読者から感想を受けることもある。また他の論文に引用されたことを知った時は、自分が投稿した論文が役立ったと、一段と嬉しさを感じることができる。

雑誌と言っても商業誌や学会誌でなくても「図書館だより」などでもかまわないが、必ず後世に残る形で執筆することを勧めたい。図書館の職員が一般職の職員と違うのは、論文を執筆することだと思う。常に仕事として論文に接しているだけでなく、図書館関係の協会や研究会の機関誌への投稿ができ、論文を作成しやすい環境にある。

幸いなことに信州大学には「信州大学附属図書館研究」というオープンアクセスの紀要があり、事例報告や図書館員の論文、図書館員が行った発表等一覧のほか、信州大学所蔵の図書館資料を使って研究した教員等の論

文も掲載している。商業誌や学会誌に発表するよりも気楽に投稿することができた。

V. おわりに

常勤職員定年退職後から地元の短大で図書館学の非常勤講師もしている。授業ではこれから司書を目指す学生に、図書館の仕事の面白さと大変さを知ってほしくて、自分の体験談など交えて話すこともある。しかし、コロナ禍でリモート授業が増え、雑談がしにくくなったのが残念である。

私の長女は大学で司書資格を取得したが、図書館とは関係ない仕事に就いた。次女は国立大学法人等職員採用試験に合格し、信州大学職員として別のキャンパスで働いている。2人とも私に相談することもなく自分で決めていた。私の背中を見ていてくれた気がして、望外の喜びを感じている。

偶然から始まった図書館員生活もあと僅かになったが、もう一回偶然があるのではないかと、期待しつつ残りの日々を過ごしている。

参考文献・注記

- 1) 石坂憲司, 折井匡. 信州大学附属図書館医学部図書館の地域関連病院への新サービスの取り組み. 医学図書館. 2009;56(2):151-5.
- 2) 折井匡. 信州大学附属病院に市立図書館の機能を持った患者図書室ができます. 全国患者図書サービス連絡会会報. 2009;15(4):65-8.
- 3) 折井匡. 国立大学病院における「患者図書室」の現状と課題 2018: 患者に医療・健康情報を提供するには. 信州大学附属図書館研究. 2020;9:199-211.
- 4) 信州大学機関リポジトリ (SOAR) [internet]. <http://www.shinshu-u.ac.jp/soar/> [accessed 2021-09-28]

1)～3) は信州大学の機関リポジトリSOARで読める。

注1) OMFは1992年に始まった「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」が2015年に名称変更された音楽祭で、指揮者の小澤征爾が総監督を務めている。(2020年および2021年は、新型コロナウイルス感染防止のため中止)。1997年から職場の先輩に勧められてボランティアに参加している。